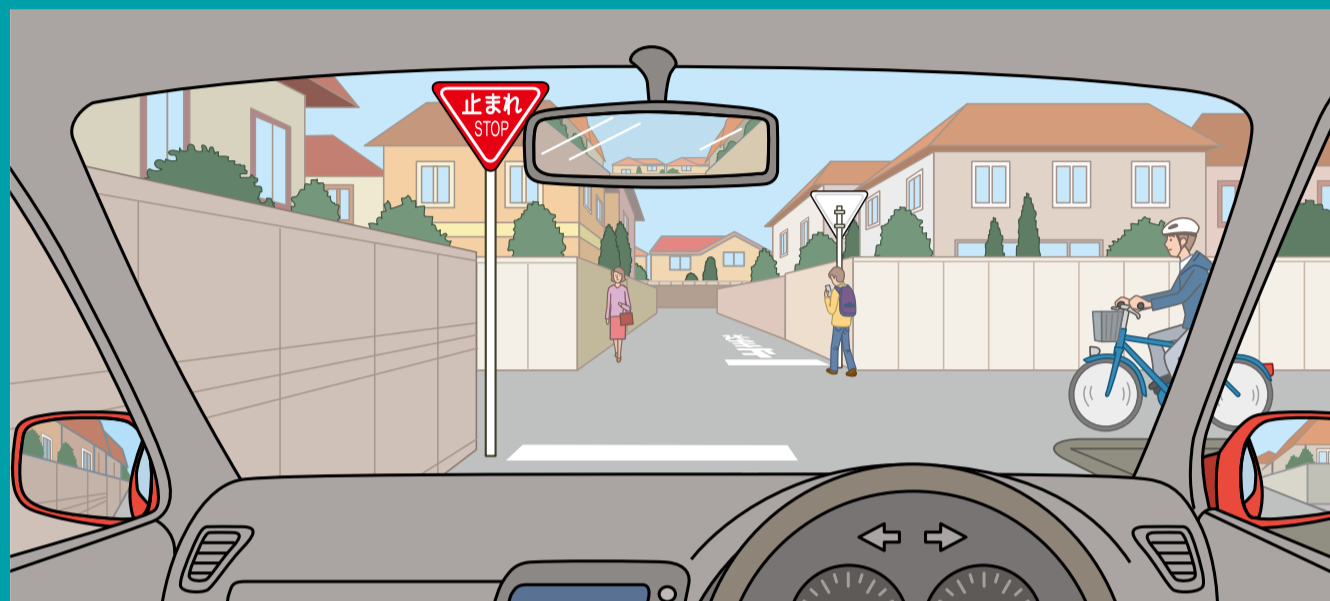


KYT 危険予測トレーニング

第 89 回 見通しの悪い交差点を通過する時 (四輪車編)

あなたは「止まれ」の標識のある場所で一時停止するところです。停止線手前で停止後、右側の自転車が道路を通過したら、左右の状況を確認できる位置まで前進しようと思います。安全に走行するためには、どのようなことを予測する必要がありますか？



交通事故を回避するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、見通しの悪い交差点を通過する時の危険について考えてもらうための KYT です。

活用方法

1. 少人数のグループをつくります。
2. 「交通場面のイラスト」を見ながら、意見を出し合います。
3. その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつければ良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト (カラー・A4版)」は下記 SJ ホームページでご覧いただけます。また PDF ファイルもダウンロード (無料) できます。

【使用上の注意】

ホンダ SJ

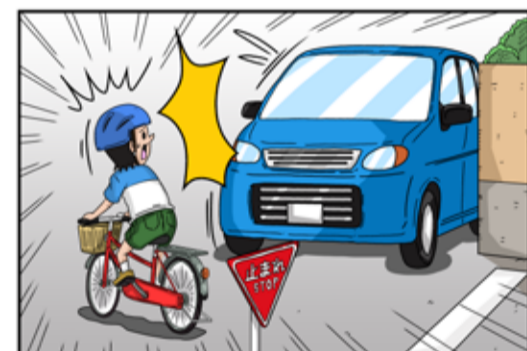
- 営利目的での利用はおやめください。
 - 内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
 - その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。
- 本田技研工業 (株) 安全運転普及本部
TEL : 03(5412)1736 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

© 本田技研工業 (株)

SJ クイズ ?

自転車編

- Q1** 2023 年の自転車関連事故 (第 1・第 2 当事者※) 件数は 7 万 2339 件でしたが、全交通事故件数に占める割合は約何%でしょう?
①約 14% ②約 24% ③約 34%
- ※第 1 当事者は交通事故の当事者のうち、過失が最も重い者または過失が同程度の場合は被害が最も軽い者。第 2 当事者は過失がより軽いか、過失が同程度の場合は被害がより大きいほうの当事者
- Q2** 2023 年の自転車乗用中の交通事故死者数 (346 人) を損傷主部位別にみると、最も多いのは頭部ですが、その割合は約何%でしょう?
①約 40% ②約 50% ③約 60%
- Q3** 小学生の自転車乗用中の交通事故死者・重傷者数 (2018 ~ 2022 年の合計) を月別にみると、死者・重傷者数が最も多いのは何月でしょう?
① 4 月 ② 5 月 ③ 6 月



「解答」は P7 下、「解説」は下記 SJ ホームページでご覧いただけます。
<https://global.honda/jp/safetyinfo/sj/>

Safety Japan Action 2024 春

～小学 1 年生をまもれ!～

Honda では、春の全国交通安全運動をリードすべく「Safety Japan Action (セーフティジャパンアクション) 2024 春」を 4 月 1 日～20 日、Honda の二輪・四輪の販売店や関連会社、各事業所を発信拠点とし、Honda グループ一体となって、すべての交通参加者へ向けて展開してまいります。この春は“小学 1 年生をまもれ!”をテーマに、「歩行中の小学 1 年生の飛び出しに『関心』『尊重』『行動』を!」に重点を置いて啓発しています。スペシャルサイトを開設し、抽選で当たるプレゼントも用意しています。下の QR コードからアクセスしてください。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。



できるニャンと“うたのおねえさん”
小野あつこさんがスペシャルサイトのナビゲーター



▲スペシャルサイトへアクセス



二輪・四輪販売会社に配布している安全運転情報誌「Think Safety」

SJ 編集部だより

～交通事故死者ゼロをめざして～

今号の巻頭 (P1 ~ 3) では、Honda が新たに開発した自転車教材を紹介した。教材の中に収録されている「観察映像」は、信号機のない交差点を通行する自転車利用者の様子を撮影した動画を見せ、受講者に自分の行動を振り返ってもらうためのものだ。これは「人の振り見て我が振り直せ」の考え方に通じる。「観察映像」をご覧になった方々に感想を聞くと、交差点を通過した自転車で、止まって安全確認をした自転車が 1 台もいなかったことが印象に残っているという。また、自転車が車両であることを再認識する方もいた。今後、自転車はもち

ろん、クルマやバイクで信号機のない交差点を通行する際に「気をつけよう」と意識してもらうことが期待できる。SJ インタビュー (P6) で取材した大森さんの研究では高校生に比べて、大学生には命令的メッセージでは意識変容につながらないという結果が出ていた。自転車教育においても、教え込むばかりではなく、「自分で気づき、自分で行動を改める」という手法を取り入れてみてはどうだろうか。弊紙をご覧いただいている交通安全指導者の皆さまには、この自転車教材をぜひ一度使ってみてほしい。